

みどりから考える街づくり

文・漆原次郎

田畑 貞壽
たばた さだとし



1931年（昭和6年）3月3日生まれ。街のなかにみどりの空間をどのようにとり入れるか、その方法を研究してきた。公園や林などのみどりの場所を網の目のようにつなげる「グリーンマトリックス」という考えかたや、地域のみどりの多さを数字で表した「緑被率」という考えかたを生みだし、さまざまな地域での街づくりに貢献した。千葉大学をはじめ、いろいろな大学で学生とともに、実際にみどりのある場所を歩いて、ようすを調べるフィールドワークもしている。

街のなかには木々や草花などのみどりがある。「むかしにくらべて、みどりがどのくらい増えたのか、減ったのか」は、その地域を大きな目で見たり、長い目で見たりすることでわかってくる。田畑 貞壽さんは、その地域がどのくらいみどりでおおわれているかを見る方法を考えだした。

団地の中にみどりの空間をとり入れる

田畑さんのふるさとは、長野県の伊那市富県だ。ここには「神田」とよばれる家があり、ここで育った。屋敷内には、湧き水の出ている小さな池がみつつあり、ひとつめは水を飲むため、ふたつめは野菜や手を洗うため、みつつめは農作業の道具の汚れを落とすために使われていた。この水を引いた田んぼでお米をつくり、毎年秋には集落にある神社に奉納していたことから「神田」という屋号でよばれるようになったという。

夏には川やため池で泳ぎ、冬には氷が張った池で下駄スケートを楽しんだ。東に歩けば、桜で有名な高遠城があり、南アルプスに続く。西を見れば天竜川の遠く向こうに中央アルプスの駒ヶ岳の山々がそびえる。「暮らしは豊かではありませんでしたが、自然のあふれるところでした」。

子どものころを思い出し、いまでも故郷の図書館に多くの本を贈るなど、ふれあいが続いている。

1950年（昭和25年）、田畑さんは千葉大学園芸学部に入った。「園芸」は、果樹、野菜、

草花や木々などを栽培する^{さいばい}という意味のことばだが、園芸学部では公園や広場をつくる「造園」^{ぞうえん けんきゅう}の研究もおこなわれていた。田畑さんは、造園の研究をしていた横山^{よこやま} 光雄^{みつお}先生の研究室に入った。

卒業^{そつぎょう}してから2年、横山先生から「日本住宅公団^{にほんじゅうたくこうだん}が立ちあがるから、造園の仕事をしたらどうか」と紹介され、団地^{だんち}を計画するこの組織^{そしき}で仕事をするようになった。はじめに田畑さんがおこなった仕事は、東京都日野市につくられようとしていた多摩平団地^{たまたいらだんち}にみどりの空間をとり入れることだった。いまでは、団地やマンションのなかに木々を植えたり、みんなで使える空間をつくったりするのは当たりまえになっている。しかし、このころの日本にはまだその考えがなかった。「外国の住宅などを見て、団地のなかに公園をつくったりしました」。

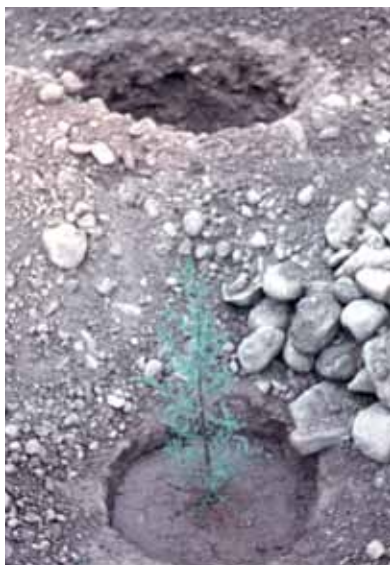
パキスタンと日本の街をうるおす

1964年（昭和39年）、田畑さんはパキスタンという国が、造園のできる人を求めているという話を聞き、その求めにこたえようと決めた。パキスタンは、インドの西にある、日本からは8000キロも離れたイスラム教の国だ。国の北のほうに「イスラマバード」という新しい首都^{しゅと}ができあがりつつあった。

田畑さんは、たった一人でパキスタンへと向かった。「何も知らなかったから行けたのかもしれない。向こうではいろいろな人が親切にしてくれました」と言う。

イスラマバードで田畑さんがおこなったのは、おもに「ランドスケープ・プランニング」だ。「ランドスケープ」は、日本語で「景色^{けしき}」や「見晴らし^{みはらし}」。「プランニング」は「計画」のこと。新しい街のなかに、人々の居心地^{いごこち}がよくなるような空間をつくるのが、仕事の目的だ。

新しい首都のまわりには砂漠が広がっていて、街も水の少ない草原地帯の中にある。みどりを増やすことが、街づくりの大きなテーマのひとつだった。



イスラマバードの街に植えられた苗木（左）。新しい首都の計画図をバックに（右）。

田畑さんは、ヨーロッパから来ていた人々が進めていた街づくりの計画やデータを見ながら、みどりを増やすためのさまざまな計画を立てていった。パキスタンの国が管理する国立公園や街並みの設計をした。人々が集い語りあうことのできる場所や、お祈りをささげる場所、イスラマバード近くのダムのまわりの見晴らせる場所などを計画した。新しい首都のまわりの農村で人びとがどのような暮らしをしているかを調べたりもした。イスラマバードのとなりにあるラワールピンディという街には、「タバタガーデン」とよばれるようになる公園もつくった。

「みどりの街ができていきました」と田畑さんはパキスタンでの仕事をふりかえる。その後もパキスタンの国から「世界遺産の古代都市モヘンジョダロなどの環境整備をはじめ、多くのみどりの回復保護のために相談に乗ってほしい」などと頼まれ、何度もパキスタンを訪れている。

日本に帰ってくると、田畑さんはパキスタンの仕事で得られたことを日本のランドスケープ・プランニングに活かそうとした。1966年（昭和41年）には、横浜市が「港北ニュータウン」という大きな住宅地をつくることにしていた。田畑さんは、街づくりに参加することになり、「グリーンマトリックスシステム」という考えかたをとり入れた。「マトリックス」とは「網のようなもの」という意味のことばだ。公園や広場、学校の校庭、みんなで使う庭、それにもともとあった林や農地などのみどりを、小道でつないで“みどりの網の目”をつくる。この田畑さんの計画は、いまでも港北ニュータウンで活かされ、街に住む人びとにうるおいをあたえている。

みどりで被われている率を地図で見る

1965年の春先のある日、東京に大雪が降った。夜になると雪はあっそう強まり、田畑さんは仕事場だった日本住宅公団から家に帰れなくなってしまった。

「よし。地図を眺めて朝まで過ごすことにしよう」。田畑さんはそう思い、仕事場にあった東京のいろいろな地図を見ることにした。田畑さんがパキスタンで過ごしていたとき、東京ではオリンピックが開かれ、日本の首都のようすも大きく変わっていた。「東京のみどりはどうなっているのだろうと思いながら、地図のうえの街路樹などに、ぼちぼちとみどり色をつけていきました。新しい地図と、古い地図と、両方に色ぬりをしていって、くらべてみたのです」。

すると、むかしの東京とくらべて、みどりでおおわれた部分がかなり小さくなっていることに気づいた。

この夜の作業をきっかけに、田畑さんは「地図などを使って地域の緑被率を出してみる」という考えかたをふくらませていった。「緑被率」とは、地域が緑に被われている率のことだ。街のなかのみどりには、山にある林、丘にある草原、川が流れているほとり、人がたがやしている田んぼや畑、歩道のわきに植えられている草木、みんなが集まる公園、古

くからあるお屋敷^{やしき}の林など、さまざまな形がある。これらを緑に被われた地、つまり「緑被地^{りょくひち}」としてひとまとめにし、「古い地図には緑被地がどのくらいあったか。新しい地図には緑被地がどのくらいあるか」と、その割合^{わりあい}を調べていくのだ。

たんに緑被率がどのように変わったかを見くらべるだけではない。田畑さんは、みどりが増えたり減ったりすることと、ほかのものごとの変化がどのように関係しているかにも目を向けた。たとえば、ある地域のなかに暮らす人が多くなればなるほど、その地域の緑被率は減っていく。また、緑被率が減れば減るほど、ぜんそくなどの呼吸^{こきゅう}の病気になる人の率は増える。虫などの小さな動物も暮らすところが少なくなり、種類が減っていく。それに、緑被地が減ると熱帯夜^{ねったいや}が多くなる、などなどだ。

自分たちの街の緑被率がどうなってきたかを考えることは、「これからどんな街をつくるべきか」を考えることにもつながる。いま、日本じゅうの市や町や村が、自分たちの街のみどりを保つため、「緑の基本計画」を立てており、「緑被率を50%まで増やそう」などといった目標がつくられている。



1964年(上)と2006年(下)の東京都のみどりの地域の変りかた。緑被率が減った。

「地元のみどりを守ろう」

田畑さんは、あるときは都道府県といった広さ、あるときは川の流れる地域の広さ、またあるときはさらに大きい首都圏^{しゅとけん}などの広さといったように、さまざまな目のスケールをもちながら、緑被率のうつりかわりを見てきた。

「地図を見るだけでなく、調べたいところまで足を運ばなければなりません」。若い学生たちを引きつれ、自然のなかでその地域のことを考えることも続ける。動物、草木、それに人びとの生きかたは、その場所に行くことでわかるのだ。

「これから先、みんなが豊かな暮らしをしていくためには、50年前や100年前の地域の姿がどうだったかも見ていくことが大切です」。

東京では、いまも郊外のほうで緑被率が減っている。そのいっぽうで、都会の中心あたりでは、わずかに緑被率が増えてきている地域もあるという。みどりがどれだけあるかを知った地域の人びとからは、「自分たちで、地元の自然を守ろう」という声もあがり、みどりを保つ活動をするグループも増えている。

自分たちの地域にどれくらいのみどりがあるか。また、みどりがあるべきか。みどりの多さを数字で表すという田畑さんの考えは、これからも街づくりに役立てられていくことだろう。